

しが国際協力親善大使レポート

いわむろ あつみ
岩室 敦美さん

隊次：2016年度3次隊

職種：青少年活動

派遣国：モザンビーク

プロフィール

滋賀県甲賀市出身。児童英語講師として働いていました。子どもたちの英語教育に携わっていたと思う一方で「青年海外協力隊になってアフリカに行きたい」という夢を諦めることができず、後悔はしたくないと一歩を踏み出し、JICA ボランティアに応募しました。

モザンビークについて

アフリカだからいつも暑いということはなく、寒いと感じる時期もあります。毛糸の帽子にコートといった日本の冬と同じような服装をしている人も見掛けます。ただ、そんな冬の時期でも昼間は半袖になるくらい暑くなる日も多いです。真夏は40度を超えることもあり、暑くて外を歩けないという日もあります。

食事はシマ（トウモロコシの粉を練ったもの）をよく食べます。シマに味はないので、豆や野菜を煮込んだもの、牛肉や鶏肉のカレーなどと一緒に食べるのが一般的です。海沿いの国なので魚も捕れますが、ほとんど焼魚として食べます。日本では生のまま食べるというと、生魚を食べるの！？と誰もが驚くので、その時はいつも刺身や寿司の写真を見せます。白身や赤身の色の違いに驚き、また綺麗に盛り付けられていることに感心しています。

モザンビークは1975年に独立し、その後1992年まで内戦も続きました。戦争という歴史がまだ色濃く残る為か、年配の方からヒロシマ・ナガサキという言葉をよく聞くことがあります。そんなモザンビークの人たちは飲んで歌って踊ることが大好き。音楽が流れると子どもから大人まで皆が踊り出し、Vamos!（行こうよ!）という声が飛び交います。

活動や生活について

私の配属先は、首都マプト州郊外にある公立小学校です。6年生と7年生の音楽の授業と、学校が休みの土曜日に鍵盤ハーモニカクラブの指導をしています。1クラス約70人×11クラス。最初は子どもたちの顔が皆同じに見え、発音の難しい名前をなかなか覚えることもできず「あなた、君、ちょっとそこの僕」と、授業どころか会話もままならない状態でのスタートでした。覚えた単語も咄嗟にはなかなか言葉にできず私は頷くばかり。褒めたいのに「あなた、良い」、注意したいのに「君、だめ」としか言えず、誰がどう良いのか何が悪いのかを伝えることもできず、もどかしさと悔しさで言語は特に苦勞しました。また各教室に時計がなくチャイムが一定に鳴らない為、皆が時間を把握することがありません。先生が教室に来た時間が授業の始まりであり、先生が終わりと言った時間が終わりになります。チャイムを合図にしていた日本と異なり、最初の頃は“もう始めていいの？いつ終わればいいのか？”と私がオロオロするばかりで、授業内容や指導方針ではなくシステムの違いに戸惑うことも多い日々でした。活動の中心となる音楽の授業は、音楽室もない、人数分の楽器も教科書も全然足りないといった物理的な問題から、子どもの時に音楽を学んだことのない先生から「歌をうたって心が豊かになるとはどういうこと？」という質問に上手く答えられず、情操教育故に明確な答えがないものに取り組むことの難しさを感じる日々でした。そんな生活の中、お茶を飲んで休憩しようと蛇口を捻っても水が出ず、加えて突然の停

電。想定内ではあったものの、はぁ。とため息をつく日も少なくありませんでした。けれど最初こそ「ポルトガル語が難しい！今日も水が出ない！夜の停電は怖い！」と騒ぐ私の話を聞いてくれていた任地の人たちですが、1年が経とうとしている今、「どう？ポルトガル語より現地語は覚えた？水？うちも出ないよ！停電？そのうち点くでしょ！」と笑って言われることに「不便ではあるけれど、生活はできるぞ。なんとかなるぞ」と物事を楽観的に考えられるようになり、生活を楽しめるようになってきました。水が出ない！ではなく水が出たからラッキー！と思い、歌って楽しいね！と子どもたちが笑っていることが素晴らしいと考え、学校では、私は音楽を教えるという立場ではあるけれど、どの先生も私にとっては皆がポルトガル語の先生だと話し、正しい言葉の使い方や新しい単語を配属先の人たちから教えてもらうことで、教える・教えられるの一方的な関係にならないような関わり合いも少しずつできるようになってきました。

あっという間の1年でした。残りの任期も皆と協力しながら、少しでも現地の人たちの力になれるよう精一杯活動したいと思います。



料理で使うピーナツを粉にしています



洗濯中です。水が出るか、いつもドキドキ



音楽の授業中です。青空教室で鍵盤ハーモニカを教えています



ビニール袋に砂を入れて、紐で括ればボールのできあがり！



休みの日は子どもたちと遊んでいます